

金問屋街横山地区は、取引形態の違いから、街の景観、機能等が非常に異なる。

地域結合：販売地域は服地ではアパレルメーカーを対象とする為都内の比率が高い。高級呉服は都内、関東、東北への販売拠点となっており、一方実用呉服（主に関東物といわれる織呉服のこと）は他の大集散地への販売が多い。洋装品は都内、関東、東北が中心だが、他商品に比べ都内の比率が低い。仕入からみると、服地では、機産地と堀留地区は強い信頼関係で結びついている。量的には北陸、浜松、尾州、東北が多いが、斯地区への依存度の高い産地は近郊及び北関東である。染色は横浜が中心である。高級呉服は伝統的流通形態が維持されている為京都の間屋を経由してくる。実用呉服では、関東・東北各産地で堀留地区

への依存度が高い。洋装品は服地に比べ地域的結びつきは弱い。直営・専属工場が千葉・茨城に多く分布している。今後は、都内などより堀留地区に近い地域との関係が強まるだろう。問屋が企画生産機能を拡充しつつあるので産地との関わりはより緊密化している。

近年、他業種の成長や零細問屋の転業により地区内の繊維卸売業は低下している。これまでも、移転、倒産企業の跡地は時間的空間的集積効果により再び繊維関連業者が利用し問屋街は維持発展してきた。1984年に都・区が出した堀留地区を問屋街として再開発する計画はそれ自体意味がある。

堀留地区は今後も都内・関東の縫製業・織物業のパートナーとして機能を向上させつつ維持してゆくと思う。

## 新潟県湯沢町の地域性に関する観光地理学的考察

近藤優子

### 1 研究の目的・方法

新潟県南魚沼郡湯沢町を観光地理学的な視点から考察し、湯沢町の中の観光的性格を4つのパターンに分類し、それにより地域区分をして、各地区の特性を明らかにしていくことで、湯沢町全体の地域性を把握することが本論文の目的である。

主な方法としては、統計資料や文献の研究とフィールドワークによる聴取調査で、その結果に基づいて、4つの地域区分を行なって考察を試みた。

### 2 研究のまとめ

湯沢町の地域性としては、まず豪雪・山岳地帯であることがあげられる。

そして魚野川と清津川という2つの水系があり、魚野川水系での集落発生の基盤が農耕であるのに対して、清津川水系での集落発生の基盤は、三国街道の宿駅制度にある、というように、2つの水系で全く違った発達のしかたがみられるのも独自の地域性である。

また、湯沢町が都市から隔絶された豪雪・山岳地帯であり、川の氾濫や雪崩、冷水しか出ないた

めに米作が不利である、などの人間が生活しにくい、厳しい自然環境にあり、住民が農林業や出稼ぎにより、なんとか生活していたという時代から、現在のような新幹線・高速道路が利用できる「観光の町」として豊かに発展した。この発展の要因が何かを考えると、地域性を明らかにすることにつながると思われたので、以下に要因をあげてみた。

1つめは、三国街道の宿駅として、清津川水系に集落が発生できたことである。清津川水系の土地は、標高も高く、積雪量も多いので、人間が生活するには困難を伴うが、またそういう厳しい状況なだけに、街道を通行する人々にとって宿駅がなくてはならぬ存在であったことだろう。このような経緯で、首都圏と新潟を結ぶ大動脈の三国街道の宿駅が湯沢町内にでき、発展のきっかけを作ったのである。

2つめは、鉄道の開通である。江戸時代には、街道で発展したが、明治に入ってから鉄道（信越線）が開通し、特に昭和6年に、上越線が開通す

ると、交通の手段の中心が道路から鉄道に移り、湯沢町内の各駅の周辺（魚野川水系）は発展を遂げることができた。

3つめの要因は、古くから湧出していた温泉や、豪雪・山岳を利用したスキー場というような、湯沢町の自然の特質を、観光業に生かすことができたことである。自然の恵みの温泉や雪・斜面を利用する観光から、夏季体育施設・キャンプ場・ハイキングコース等を整備した、通年型観光地を目

指して、より一層の発展を遂げようという意欲が十分にあるということからも、現在の発展ぶりがかがえる。

このように、豪雪、山岳地帯が、交通手段の改良と、観光資源・観光施設の開拓・整備拡充とによって、首都圏の人々にとっての身近な観光地として発展していることが、湯沢町の地域性である、と考えられる。

## 北関東の山村 ——南牧村の事例研究——

鈴木里美

この論文は、北関東の山村である群馬県南牧村の砥沢部落について、周辺地域とのつながりを重視して、地域の様々な要素の関連をつかみ、その地域を総合的に把握することにより、その地域で生きる人々の生活を、時代の流れに沿って描くことを目的とする。

研究の方法は、南牧村砥沢部落148戸のききとり調査を主なものとし、加えて南牧村に関する文献や、山村に関する研究論文など、文献調査も行った。

研究の結果は、砥沢部落は、砥山の存在のため、砥石業従業者数が多く、またそれに従事するための人口の流入や、貨幣経済の浸透など、古くから一般的農山村と異なり、自給自足の生活というものには行なわれていなかった。また上州・信州間の交通の要所であり、関所が置かれ、信州との峠越えの交流により市がたち、商業も栄えていた。このように都市的要素を持つ地域であった。その後明治・大正・昭和と時代を経て、東京を中心とする交通・経済・文化体制になるにつれ、鉄道網の

関係もあり、長野との峠越えの交流が衰退し、その商業機能も衰退し、次第に不便な奥地の山村としての性格を有してきた。また、高度経済成長を経て、旧来の経済基盤であった砥石業、コンニャク・養蚕を主とする農業、薪炭業・製材業などが崩壊していき、一般的山村と同様に、挙家離村等による人口減少、それにとまらぬ過疎現象があらわれてきた。また新しい経済基盤として、富岡や下仁田への通勤などもみられた。また砥沢において特筆すべきことは、かつての大農家層の経営による下請工場（縫製・金属プレスなど）の増加である。これにより砥沢はその商業的機能を失ったが南牧村において新たに就業地としての機能を有してきた。このように高度経済成長による旧来の経済基盤の崩壊に対して、積極的に対応してきたということは、砥沢が古くから都市的要素のある商業活動の盛んな地域であったことにより、それがそこでの人々の生活や価値観の中に地域性として存在していたことによるためである。